

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その11）

～ 「頑張って！！ 自主練習」 ～

2020年4月吉日

広島地区ミニバスケットボール連盟

副会長 大庭 浩 資

広島地区ミニバスケットボール連盟の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

新型コロナウイルス感染予防の影響で、練習や試合の自粛が1か月以上続く中、選手も保護者も、そして指導者も悶々とした日々を送られていることと思います。特に5年生以下の部員は、6年生が卒業して今度はぼくたち・わたしたちの番と張り切っていただけに、その出鼻をくじかれがっかりしていることでしょう。

私がお手伝いしているチームでも、日々刻々と変わっていく自粛要請の情報を保護者とコーチが互いに共有しながら対応に当たっています。しかし正直なところ、部にとって、また選手にとってなにが一番よいのか、なかなか答が見つからず頭を悩ませています。

そんな中で私は、いろいろな指導者の皆様に教えていただいた事を参考に、家でもできる体幹強化や体力づくりのメニューを示し、チェックシートとともに部員に配りました。ただ実践してくれることはあまり期待していませんでした。なぜなら昔、野球をしていた頃、自分に自主練習を課した時がありましたが、一人でするのは面白くなく、長続きしなかった経験があるからです。（ただ単に、自分のやる気が足りなかったからかも・・・笑い）

ところが地域をウォーキングする途中、思いもかけぬ光景を目の当たりにし、大きな感動を覚えました。それは家の庭先で体力づくりに取り組む姉妹、公園で黙々とドリブル練習をする低学年、また太田川の土手を走り続けるグループなどなど。もしかしたらこのような光景は、皆さんの地域でも見られるのかもしれない。

みんな本当に運動が好きなのです。バスケットボールが好きなのです。ボールを使った練習がしたいのです。そして部員全員が揃って体育館で練習がしたいのです。しかし残念ながら、今は「見えない敵」を相手に、じっと我慢し基礎体力をつけておく時期です。

選手の皆さん、自主練習は苦しいでしょう。面白くないでしょう。でもいかにコツコツと練習することが大切であるかを表す言葉を送ります。さてこの言葉の意味が分かるかな？

「今の練習は、コーチをはじめとする大人がやらしているのかもしれない。そしてこの練習をしたからといって、体力がついたり、上手になったり、試合に勝てるようになったりするとは限りません。でもこの練習をしなければ、体力はつかないし、上手にならないし、試合にも勝てません。」

そして保護者の皆様、指導者の皆様、今我々にできることは、選手の心と体のケアに努めながら、とにかく一刻も早く体育館でボールを使った練習ができる、これまで当たり前だったことが当たり前になるように祈るだけです。

話は変わりますが、先日、あるコラムが目にとまったので紹介します。

ここには経験豊富な有名監督さんでも、レギュラーを決める時には苦悩する様子が書かれています。

ミニバスケットボールと甲子園を目指す高校野球、小学生と高校生では立場や尺度が違ってくるかもしれません。しかし、どの選手を試合に出すかを決める時には、どの指導者も大なり小なり苦労されていると思います。このコラムが何かの参考になれば幸いです。

「みんなの3年間 日大三校・小倉全由監督」

甲子園を2度制覇した日大三校・野球部監督に「3年夏のベンチ外」について聞いた。

小倉全由監督、62歳。短くそろえた毛先から、スッと伸びた背筋を通り、ストッキングをスマートに履いたかかとまで、高校野球にかけてきた情熱と自信がみなぎる。近寄りがたさはない。自信はゆとりになり、礼儀正しく、温和だ。

監督をしていく上での苦しさが話題になった。

小倉監督「夏に3年生でベンチ外が出てきます。その子たちになんて言えばいいのか。イヤですね、それが……。今もなんて言えばいいのか。できるなら、毎年の部員数を減らしたいと思うんですよ。それでも（3年で）外れる子は出てくるんですけどね」。

短髪に手をやりながら話す。この苦悩から、できるなら解放されたい、そんな切実さが伝わってきた。

(中略)

毎年、東京都高野連にメンバー提出するギリギリまで選考を続ける。「うちは最後の最後まで競争させます」。メンバー外を覚悟する者を除き、気が抜けない。最後まで競り合う。

7月上旬、寮の食堂に全選手が集まり、小倉監督がメンバーを発表する。20人のメンバーはほどなくして室内練習場に移る。そこで泣いたり、安堵したり、仲間を鼓舞したり。思いが交錯する。

小倉監督「私はそこには行きません。食堂から室内練習場は通路でつながっています。気配で何となく分かります」。

40年前、球児で泣けなかった小倉監督の胸の懺悔の思い。

小倉監督「自分が日大三校で野球をしていた時は、今のような感じじゃなかったんです。『甲子園に行けたら行こうぜ』。そんな感じでした。当然、負けて悔しさはなかった。自分は背番号13でした。サードの控え、サードコーチャーでした」

夏に負け全力で泣く今の生徒を見てこう思う。「ワンワン泣くんです。自分は、あの時、泣けなかった」。40年以上前の夏を思い起こす時、胸を焦がす部活への懺悔の思いだ。「甲子園に行けたら行こうぜ、なんて……。そんなので勝てるわけないですよ。夏は、熱いものがないと勝てないんですから」。

静かな目だった。しかし記者は感じた。チームとして、青春をかけ没頭できなかったことへのむなしさを。心の中で、小倉監督は拳を握り苦しんでいる気がした。

競争の宿命……。きれいごとじゃない、飲み込めない苦しさ。

小倉監督「よく子どもたちには言うんです。ベンチを外れた選手にしか、外れた気持ちには分からない。試合で受けるプレッシャーは、試合に出た選手にしか分からない。だから、それを自分のものにしないといけないんだ。マイナスにするんじゃなくて、プラスにしないと」。

ベンチを外れた絶望は、いつかプラスに転じる。巣立った選手が、それぞれの道の中で、目の前の事柄から逃げずに向き合うことを願う。それは自分に言い聞かせるような口調だった。

小倉監督はベンチ外の3年生に、どう声をかければいいのか、迷いながら夏を迎える。「なぐさめでしかないですよ」。財産にしろ、プラスにしろと、いくら言っても、そこにはいくばくかの無力感が漂う。

グラウンドに集中して、試合に没頭して、チームは勝つ、負ける。その背後で、じっと息を潜め戦いに食い入る影がある。2年3か月の情熱を込め、チーム内の競争に敗れた者たちの悔しさと悲しさと、それを必死に心の奥底に押し込もうとする意地がにじむ。

それが部活の宿命だ。そこに競争がある限り、きれいごとではない、飲み込めない苦しさがある。